



詩篇

詩篇22篇・大祭司の祈り

ヘブル人への手紙

2

「ただ、御使いよりも、しばらくの間、低くされた方であるイエスのことは見ています。イエスは、死の苦しみのゆえに、栄光と誉れのお受けになりました。その死は、神の恵みによって、すべての人のために味われたものです。」
 10 神が多くの子たちを栄光に導くのに、彼らの救いの創始者を、多くの苦しみを通して全うされたという点として、ふさわしいものであったのです。
 11 聖とする方も、聖とされる者たちも、すべて元は一つです。それで、主は彼らを兄弟と呼ぶことを恥としないで、こう言われます。
 12 「わたしは御名を、わたしの兄弟たちに告げよう。教会の中で、わたしはあなたを賛美しよう。」
 13 またさらに、
 14 「わたしは彼に信頼する。」
 15 見よ、わたしと、神がわたしに賜った子たちとを言われます。
 16 さて、子たちはみな血と肉とを持っていますので、主もまた同じように、これらのものをお持ちになりました。これは、その死によって、悪魔という、死の力を持つ者を滅ぼし、
 17 一生に渡る死の恐怖に悩まされて奴隷となっていた人々を解放してくださるためでした。
 18 主は御使いたちを助けるのではなく、確かに、アブラハムの子孫を助けてくださるのです。
 19 そういって、神のことについて、あわれみ深い、忠実な大祭司となるため、主はすべての点で兄弟たちと同じようにならなければなりません。それは民の罪のために、なだめがなされるためなのです。
 20 主は、ご自身が試みを受けて苦しまれたので、試みられている者たちを助けることができになるのです。

14 さて、私たちのためには、もうもろの天を通られた偉大な大祭司である神の子イエスがおられるのですから、私たちの信仰の告白を堅く保とうではありませんか。
 15 私たちの大祭司は、私たちの弱さに同情できない方ではありません。罪は犯されませんが、すべての点で、私たちと同じように、試みに会われたのです。
 16 ですから、私たちは、あわれみを受け、また恵みをいただいて、おりにかなった助けを受けるために、大祭司の御座に近づこうではありませんか。
 17 大祭司はみな、人々の中から選ばれ、神に仕える者から任命を受けたのです。それは、罪のために、さげ物といけにえとをささげるためです。
 18 彼は、自分自身も弱さを身にまとい、知な迷っている人々を思いやることのできるのです。
 19 そしてまた、その弱さのゆえに、民のためだけでなく、自分のためにも、罪のためのさげ物をしなければなりません。
 20 まただれでも、この名義は自分で得るのではなく、アロンのように神に召されて受けるのです。
 21 同様に、キリストも大祭司となる栄誉を自分で得られたのではなく、彼に、
 22 「あなたは、わたしの子。」
 23 きょう、わたしがあなたを生んだ。」
 24 と言われた方が、それをお与えになったのです。
 25 別の御所で、こうも言われます。
 26 「あなたは、とこしえに、メルキゼデクの位に等しい大祭司である。」
 27 キリストは、人としてこの世におられたとき、自分を死から救うことのできる方に向かって、大きな叫び声と涙をもつて祈りと願いをささげ、そしてその敬虔のゆえに聞かれました。
 28 キリストは御子であられるのに、お受けになった多くの苦しみによって従順を学び、
 29 完全な者とされ、彼に従うすべての人々に対して、とこしえの救いを与える者となり、
 30 神によつて、メルキゼデクの位に等しい大祭司となえられたのです。

詩篇の22篇はダビデが書いたとかいろいろと書いた人を言いますが、これは、誰について書いたのかというのを考えることは、非常に重要なことだと思います。

それを探るための鍵は、22節にあります。新約聖書の中で引用されている22篇の直接の引用は、「わが神、わが神…」というところですが、もう一つ別の箇所が引用されています。それが「私は御名を私の兄弟たちに語り告げ、会衆の中で、あなたを賛美しましょう。(22節)」これが実は、ヘブル人への手紙の2章で引用されています。「私は御名を、私の兄弟たちに告げよう。教会の中で、私はあなたを賛美しよう。(2章12節)」というところで引用されます。

「私は彼に信頼する。」というふうが続いていきますけれど、この引用は何の話の中で引用されているのかということを考えます。ヘブル人への手紙は何の手紙なのかという全体の概略が前に分析したものはありますけれど、ヘブル人への手紙自体は、イエス様が主牧者である。それと、私たち羊たちに牧場が与えられる。大祭司であるキリストの栄光の座を賛美することと、神の都について。その都に入れるのは御声に聞き従う羊たちですよ。信仰と忍耐をもってその都を待ち望みなさいね。大祭司はご自分を捧げものとしたということがこの手紙の概略になりますけれど、そのヘブル人への手紙の中で引用されています。

そして、直接引用されているところの前を見ればわかるように、「多くの苦しみを通してこの目的を果たされました。十字架の苦しみを通して栄光の冠を受けました。死の苦しみのゆえに栄光と誉れの冠を受けました。」それは誰の働きなのかということが17節にあります。そういうわけで、神のことについて、あわれみ深い、忠実な大祭司となるために、主はすべての点で兄弟たちと同じようにならなければなりません。それで、ご自身は試みを受けて苦しめられたので、わたしたちを助けることができます。偉大な大祭司である神の子イエスがおられるので、私たちは信仰の告白を語りあげましょう。信仰の告白を固く保とうではありませんか。大祭司はわたしたちの弱さに同情できない方ではありません。罪は犯されませんでした、すべての点で私たちと同じように試みに会われた。

その大祭司の働きは、(5章の最初から)自分を捧げものとして捧げた。これは大祭司の役割です。5章7節のところに特別に十字架の話が書いてあります。「キリストは、人としてこの世におられたとき、自分を死から救うことのできる方に向かって、大きな叫び声と涙とをもって祈りと願いをささげ、そしてその敬虔のゆえに聞き入れられました。」これが、わが神、わが神といううめきの言葉です。うめきの言葉、叫びの言葉を主に捧げて救われましたということは、大祭司として捧げている祈りである。とりなしの祈りであるということが、ここからもわかると思います。

11

1 信仰は、望んでいる事から、保証し、目に見えないものを確信させるものです。

2 世の人々はこの信仰によって救済されました。

3 信仰によって、私たちは、この世界が神のことは造られたことを悟り、したがって、見えるものが目に見えるものからできたのではないことを悟るのです。

4 信仰によって、アベルはカインよりもすぐれたいけにえを神にささげ、そのいけにえによって彼が義人であることが認められました。

5 彼は、堅い基礎の上に建てられた都を待ち望んでいたからです。その都を設計し建設されたのは神です。

6 しかし、事実、彼らは、さらにすぐれた故郷、すなわち天の故郷にあっていました。それゆえ、神は彼らの神と呼ばれることを恥とみなさうとせず、神は事実、神は彼らのために都を用意しておられました。

12

1 こういうわけで、このように多くの証人たちが、雲のように私たちに取り巻いているのですから、私たちも、いっさいの重荷とまわりつく罪とを捨て、私たちの前に置かれている難走を忍耐をもって走り続けようではありませんか。

2 信仰の創始者であり、完成者であるイエスから目を離さないでいなさい。イエスは、ご自分の前に置かれた喜びのゆえに、はすかしめをものとせず、十字架を忍び、神の御座の右に着座されました。

3 こういうわけで、私たちは揺り動かされず、御国を受けているのですから、感謝しうではありませんか。

13

12 ですから、イエスもご自分の血によって民を聖なるものとするために、門の外で苦しみを受けられました。

13 ですから、私たちは、キリストのはすかしめを身に負って、宿営の外に出て、みもとに行くではありませんか。

14 私たちは、この地上に永遠の都を持っているのではなく、むしろ後に来ようとしている都を求めているのです。

15 ですから、私たちはキリストを通して、賛美のいけにえ、すなわち御名をたたえるくちびるの果実を、神に絶えずささげようではありませんか。

14

16 ですから、私たちは、さらにすぐれた故郷、すなわち天の故郷にあっていました。それゆえ、神は彼らの神と呼ばれることを恥とみなさうとせず、神は事実、神は彼らのために都を用意しておられました。

ヘブル人への手紙 大牧者+羊 (牧場)

大牧	1:1-2:18	大祭司の栄光の座、栄光の座
一	3:1-4:13	宿営に入る約束、御名をたたえる
大牧	4:14-7:28	信仰の創始者である大祭司
大牧	8:1-10:18	大祭司のささげもの、新しい契約
一	10:19-12:27	信仰の創始者により都を待たせ
一	13:28-14:25	都に入り、感謝と賛美をしようとする

※1 1:1-3, 8:1-2, 8:3, 13:20-21 大祭司の座
※2 14:28-15:17にえ

そのヘブル人への手紙の中で、皆よく知っていて、励まされるところだと思いますけれど、11章の中に「信仰によって…、信仰によって…、信仰によってアベルは…、信仰によってアブラハムは…、信仰によってサラは…、」と先祖たちの信仰に見習うように長く教えているところがあります。22篇の4節にも「私たちの信仰の先祖たちは、あなたに信頼しました。私たちの先祖は、あなたに信頼して助け出されました。恥を見ませ

んでした。あなたに叫んで助け出されました。」このヘブル人への手紙の11章のストーリーの説明のところを、短くここで逆に引用している感じですね。

大祭司であるキリストの働きを話しているということであれば、22篇はどういう構造になっているかということですが、ヘブル人への手紙の12章2節を見てください。

「信仰の創始者であり、完成者であるイエスから目を離すな、イエスは何をしてくださったのか、それは、ご自分の前に置かれた喜びのゆえに。はずかしめをものともせず十字架を忍び、神の御座の右に着座されました。」十字架と復活の詩篇だというふうに覚えていたのですが、間違えていました。十字架と御座に着く詩篇です。復活を通り超して召天した。召天して右の座に着かれましたというところまで一気に行ってしまいます。

はずかしめをものともせず十字架を忍び、(忍ぶとは待つこと、信頼すること)信仰をもって十字架の上での苦しみ、はずかしめを忍んだというのが前半です。そうしたら、神の御座の右に着座されました。王権は主のもの、主は国々を統べ納めておられる。神の右の座に着いたあわれみ深い大祭司となった。だから、御国を受けているのだから、感謝しようではないか。都を与えられるのだから、賛美しようではないか。賛美のいけにえを捧げる。賛美のいけにえ、すなわち、御名を讃えるくちびるの果実を絶えず捧げようではないか。これが、私たち的大祭司が捧げる捧げもの。賛美のいけにえ。この賛美の中に神様は住んでくださる。

この賛美がわたしたちのいけにえとなっているということで、この22篇全体が大祭司のご自分を捧げたいけにえになったという前半と、そのいけにえを捧げたので大祭司となった。メルキゼデクに等しい王であり、祭司となったというのが後半。その22篇の光を当てた私たちにも適用することを教えるのがヘブル人への手紙である。

「永遠の契約の血による羊の大牧者」という最後の祈りのところにもあるように、永遠の契約の血、その十字架の血によって私たちを導いてくださる平和の神であるということが22篇から教えられているところ。22篇は大祭司の詩篇であるということを学ぶことは、ふさわしいものとだと言えらると思います。

22と手紙。ヘブル2:12 御名を讃へるに苦め、敬愛を賛美。

- ・ 2:9-10. 私たちの代表として苦しみ
17-18 あわれみ深い大祭司
- ・ 5:7 大祭司を呼びよせに救われた。
5:1-10 大祭司。メルキゼデク。
- ・ 12:28 感謝しよう。13:15 賛美のいけにえ。
- ・ 13:20 永遠の契約の血による羊の大牧者。

[主の祈り]

- ・ 御名を讃へる。3,22
- ・ 御国 27-31
- ・ みことば 23-26
- ・ パン 26,29
- ・ 罪の赦し 1-10

罪赦

聖元。

のちを、大の手から。
救うてください。
ひ口から、野牛の角から。
私は私に答えてくださいます。
私は、御を私の兄弟たちに語り告げ
金衆の中で、あなたを賞賛しましょう。

聖名

御旨

- ・聖名
- ・御國
- ・御旨
- ・パン
- ・罪赦
- ・恵校

初め、果て来てでもみな、思い起こし、
 主に帰つて来るでしよう。
 また、國々の民もみな
 あなたの御前にて伏し拝みましよう。
 以上のこと、王様は、はなはたの
 主は、國々を統一する為めておられる。
 神の給顧な者もみな、**食ふ**、**伏し拝み**、
 ちりに下る者もみな、**主の御前に、ひれ伏す**
 われのいのちを救へることのできない人も
 知子孫たのみにしては、
 主のことか、次の時代に歸り告げられよう。
 ひばられて、主のなされた業を、
 主の生れたる民に告げ知らせよう。

[illegible]

kurabeteyomu.com
2013.3.3
@kannokazuhiko

大祭司が捧げている祈りは、実は、大祭司が教えてくださった「主の祈り」の概略とも並行しているということが言えます。御名があがめられること、御国が来ること、御心が行われること、パンの話、罪の赦し、悪から救われること、これがどのような構成になっているのかは、自分で確かめてみてください。ここに、前半が罪の赦し、次が悪から救い、御心を行う、御国が来る、それで、御名の話とパンの話があるというように、全体が構成されているということを確認してみてください。